
神立神様学園高等学校神頼み部の神ってる奴ら

Y/UMA

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

神立神様学園高等学校神頼み部の神ってる奴ら

【Nコード】

N2523S

【作者名】

Y/UMA

【あらすじ】

うちの学校に集うのは変人ばっか。俺が所属している部活、神頼み部はその中でもさらに変人ばっかの集い。だからって俺は変人じゃないぞ？うん、たぶん。だからそんな目で俺を見るな！！誰か俺を普通と言ってくれ！！（途中で異世界にトリップしたりもする。基本学園コメディです。）

時間は人を動かせる（前書き）

短期連載予定です。

拙い文ですが、楽しんでいただけると幸いです。

時間は人を動かせる

何一つ動かず静まり返った放課後の教室。

だが、その場所に一つだけ似合わないものがあつた。

テント。普通は山などに張られるものだ。しかしそれは今、教室に張つてあつた。

いきなりテントが揺れ始め、先程までの静寂が破れる。

一人の青年がテントから顔をだした。ぼさぼさの深く、暗い黒髪とまるでやる気の感じられない黒い瞳がよく目立つ。

「ありや？もうこんな時間？まずいな、行かねえと」

騒がしい道場で何人もの胴着を着た人間を一人の男、いや漢が投げ飛ばしていた。

「男、侠、漢おおおお！！」

日の光を浴びて輝いている汗が頬をつたり下へと落ちる。

動く度に燃えるような赤色の髪が揺れ、鋭い目つきがかつてくる者を威圧する。

涙目でヤケクソ気味に突っ込んで来たスポーツ刈りの青年を投げ飛ばし、その漢は汗を拭った。

「どうやら行かねばならぬ時がきたようだ」

黒いテーブルを数人の青年達が囲むように座っていた。

手にはトランプを持っている。

その中で一際目立つ青年がいた。脱色させた銀色の髪に何を思つたか、赤いカラーコンタクトレンズをはめている。着ている服はタキシード。

銀髪赤眼。その青年が、他の青年が机にトランプを置くのを見て

ニヤリと不気味な笑みを浮かべた。

「はい、俺の勝ち。そんじゃ、俺先に抜けるぜ」

手札をテーブルに投げ捨て、チップを回収する。

「勝ち逃げかよ！？ずるいぞー！」

抗議する青年達を馬鹿にしたように嘲笑い白髪赤眼は言った。

「悪いな、時間なんだ」

コンピューター室でピコピコと音をたてながらゲームをしている青年がいた。

手にはPSPを持っている。

じゃあ、コンピューター室使う意味ないじゃん？と言われたら彼はここが落ち着くからと答える。

何でゲームをやるのと言われると、そこにゲームがあるからだ！と答える。理由になってないと言われると、ここに俺がいるからだ！と答える。

そんな彼は鎧を着て、背中には盾と剣をぶら下げていた。いや、装備していた。

彼はふと顔を上げた。その顔には決意の表情が浮かんでいる。

「時は満ちた。魔王を倒しに行かなくては」

廊下でたくさんの女の子に声をかけている青年がいた。

明るいふんわりとした感じの茶色の髪にこれまた明るい茶色の目。着ている白のYシャツがよく似合っている。

どうやら、少女達を口説いているようだが、その片手には明らかにいかがわしいマンガ本を持っている為、最早何がしたいのかわからない。

髪を自然なしぐさでかきあげ、青年は何気なく自分の腕時計を見る。

そして、悲しそうに微笑んだ。
「ごめんよ。別れの時がきたようだ」

普通の学生のように見える普通の髪型で普通の服を着て、普通の目をした青年が普通に掃除を終え、普通に自販機で普通のジュースを買った後、これまた普通に呟いた。
「そろそろ行かなきゃな」

「「「「部活の時間だ!!」」」」」

一人の青年が回る椅子にふんぞり返っていた。
傍らには、移動式カーテン。もう傍らには大きな袋が置いてある。
「……遅え」
その時、いわゆる部室のドアが開いて……

神立神様学園高等学校。ここは、神を必要とした世界の為に、次期神様候補の神ってる奴らを集めた神ってる学校。物語は、ここから始まる。

日常は彼らを動かせない（前書き）

全編UMA

日常は彼らを動かせない

「海賊王に、俺はなる!!」

麦わら帽子をかぶり、赤いチョッキに青い短パンを履いた青年が叫んだ。

「一人であっててくれ」

普通の私服を着た青年が冷たく返す。

普通の青年、佐藤達也は先程叫んだ男、つまりこの部の部長があのようなことを言うのに今やすっかり馴れていた。

達也の通っているこの神立神様学園高等学校は、何かしらの分野でずば抜けている才能の持ち主達が通う学校だ。それ故に、かなりくせがある謂わば変わり者が多い。達也自身も神ってるほどツツコミに向いている人間なのだから。

達也はつつい些細なことにもツツコミをいれてしまう。小学校、中学校とツツコミを入れ続け、周りの人間に「何であんたいちいちツツコミ入れる訳?」と奇異の目を向けられていたが、仕方ない。どうしてもボケを拾いたくなるのだ。もつとも、最近は飛び交うボケの量が半端なくて、スルースキルも身につけつつあるが。

「部長!? ジョブチェンジするのか!? でも海賊はお勧めできないぜ!! 魔法使いとかどうだ? 俺のパーティー、魔法使える奴いなくってさ」

まるで勇者のような恰好をした青年、まがつ ゆっき曲津雄輝が携帯ゲーム機を机の上に置いて、大声をあげる。

「いや、普通はいねーって!!」

達也がツツコんだ。

そんな達也を無視して勇者雄輝は部長と呼ばれた青年に手を差し出す。

「俺と一緒に魔王を倒しに行こう!!」

「いや、魔王とかいないから!!」

諦めず達也はツツコミを入れた。

その言葉に雄輝は反応する。

「いるさ！！何言ってるんだ！？世界の危機なんだぞ！！」

「じゃあどこにいるんだよ！？」

そう聞かれた雄輝と部長は満面の笑みを浮かべ自分達の胸を親指で指す。

「それは……俺達人間の心の中、かな？」

「いねえよ！！いたとしてどうやって倒すつもりだったんだよ！？」

そんな達也のツツコミももう届いていない。既に二人は別世界だ。部長は勇者雄輝と手を取り合っている。いい笑顔だ。

「何、俺がおかしいの？なあ、東吾^{とうご}？」

普通の青年は助けを求めるように先ほどから黙り込んでいるなかおしゃれな青年に話しかける。

「静かにしてくれないか、佐藤君？見て分からないのかい？僕は今、女の子を口説くの忙しいんだよ！！」

手にPSPを握りながら、画面の中の女の子に甘い言葉を囁き続ける青年、東吾に達也はキレた。

「ゲームの中でだろおおおおお！？何で、話しかけちゃいけないんだよ！！邪魔なのか！？俺はそんなに邪魔なのか！？」

「クッ！？何するんだ！！佐藤君がそんなこと言うから愛香ちゃんにふられちゃったじゃないか！？」

「責任転嫁じゃねえええか！？」

「僕は君を嫁にもらったつもりはない！！」

「そういう意味じゃねえええ！！」

達也は怒り狂っていた。

その怒りは留まることを知らず、何故か部室の中に張ってあるテントの中にいる人間達にぶつかる。

「お前らも何やってんだよ！？」

テントの中では

「男らしくカードは変えず戦うべし！！」

赤髪の目立つ漢が床にトランプを叩きつける。

「おいおい、火怒ポン（かどぼん）。それじゃポーカールにならない
だろ？で、お前はとうすんの吉岡？」

銀髪赤眼にタキシードという嫌に目立つ青年が黒髪黒眼のやる気を
全く感じさせない青年に聞いた。

「ん？俺もめんどいからこれでいいや」

「ったく、お前らなあ……じゃあ俺もカードを見ずにノーチェンジ
だ」

「勝負！！」

火怒ポンと天斗が伏せていたカードをめくった。

「漢おお！！男、侠、漢おおおお！！？」

「へっへーん、俺の勝ち」

天斗が笑う。

「フオーカードだとお！！？」

銀髪赤眼が驚きの声をあげた。

「どうだ！！タキシードお前は？」

そう聞かれてタキシードと呼ばれた銀髪赤目のタキシード野郎は
ニヤリと笑い、カードをめくっていく。

スペードの10、スペードのJ、スペードのQ、スペードのKそ
して……

「まっ、まさか！！？」

「スペードのA、死神だ！！」

「ロイヤルストレートフラッシュだとおおおお！！？」

天斗が驚愕の表情を浮かべる。

「スペードのA、死に神だ！！じゃねええええ！！」

達也がトランプを吹き飛ばす。

「あああ！？何てことを！？」

タキシード野郎が悲鳴を上げた。

「部活動しろよ！？ここ何部だよ！？」

「神頼み部だ！！神頼みをするしかなくなっただぐらい困った人をま

るで神様のように助ける部活だ！！男ならず覚えとくべし！！」

火怒ポンが親指を立てた。

「知つとるわあああああ！！あれか？俺がおかしいのか？分かつてるなら、人助けをしようぜ！！そんな目で見るな、まるで俺がおかしいみたいだろ！？」

他の部員達が達也をジト目で見る。

「み、見るなあああ！！そんな目で俺を見るなあああ！！」

叫ぶ達也の姿を見ながら天斗は手を叩く。

「よし、まずは一旦キャンプをしよう！！」

軽快な音と共にでてきた台詞に達也は天を仰いで叫んだ。

「誰か俺を普通と言って下さああい！！」

愛は人を動かせる1（前書き）

完全UMA

愛は人を動かせる1

「勝てよ、兄さん」

銀色の鎧を着た部長が部室を見渡す。

部室は静まり返っていた。

「誰か何か反応しようよ」

「悪いな部長さん、今日は26時間ゲームの日だ!!」

「いつもだろ!!」

ゲームの画面に向かい続ける雄輝に部長はツツコム。

「いや、26時間の方にはツツコまないのな」

達也が数学の教科書と格闘しながら呟いた。なんだか最近全てにツツコミを入れることに対しては諦めがちになっている。

「いや、こいつを誰だと思ってんだ? 世界一神ってるゲーマーだぜ?」

「ゲーム愛で時空の壁を越えたのか!？」

「まあ、神ってる奴らはそんなこと余裕だろうね。現に僕も女の子への愛で時空を超えているしね」

口をはさんだ東吾が壁にもたれながら髪をかきあげ、呆れたような表情を浮かべている。

「……………俺、転校しようかな」

達也が遠い窓の外を見つめながら言った。

「しかし、人助けをする部なのにこうも依頼がこないとは……………なあ
っ!？」

言ったそばから扉が開き、一人の青年が入ってきた。

「!？」

部員達は、驚愕の表情を浮かべる。

：俺：は笑顔を浮かべ、彼らに尋ねる。

「人助けをやってる神頼み部ってのはここか？」

そう言い、辺りを見渡しこの場所に似合わないテントを見つけた。

「山岳部じゃないんだよな？」

テントがもそもそつと動き、中から銀髪赤眼と黒髪黒眼と赤髪黒目がでてきた。

なんなんだこいつらは？とても人助けをする奴らには見えないがいや、人を見た目で判断してはいけないな。

「地の文を乗っ取られた！？」

何を意味の分らないことを言ってるんだ？こいつらは。変人の集まりと聞いていたがまさかここまでとは……

だが、俺は大人だ。大人な対応をしよう。

「あつてるんだな？」

「ああ、間違いないここは人助け部だ。立ち入った話しをするのもなんだし、とりあえず一旦キャンプにしないか？」

黒髪黒目の少年が俺をキャンプに誘ってきた。

「いや、遠慮しとくよ。自己紹介もまだだしね」

やあ、みんな。俺の名前は主役 ヒーロー。神様学園高等学校の高校一年生さ。

神ってる所は世界一神ってる主人公だ。覚えておいてくれ。

「……お前、絶対主人公じゃねーだろ」

「というか、地の文で語るな！！普通に喋れ！！」

ここの部長らしき人間と普通っぽい少年が言った。

俺はその言葉に少し不快感を覚える。

「何を言っんだい？今朝もUFOにキヤトラれたし」

そう、俺がUFOにキヤトラれたのは今朝のことだった。あの時、

俺は……

「だあああつ！！回想やめいっ！！うっとおしい。あと、地の文返せ！！上から声みたいに降ってきてうっとおしいんだよ！！」

達也が回想を止める。

馬鹿なっ！？僕の思考が分かるのかっ！？くっ、ならしばらく封印するか。

「ここからがいいとこだったのに」

主役が残念そうな顔をした。

「で、主役君だったっけ？お前何を助けて欲しいんだ？」
部長が尋ねる。

「頼っていいんだな？」

「まあな。あんまりにも無茶なこと以外はどうかしてやるよ。俺達は暇だしな」

「そうか……実は俺には好きな子がいるんだ。その子の神ってる所が世界一神ってる危険メーカーで、僕はその子に告白したいんだけど……」

喋っていくうちに段々と声が小さくなっていく主役。

「したらいいじゃん？お前、世界一神ってる主人公なんだろ？なおさらどうにかなるんじゃないか？」

達也が怪訝そうに言った。

「そうだ！！男なら告白は自分の力でやるべし！！」

火怒ポンが力強く言う。

「僕もそうしようと思うんだけど、彼女に声をかけようとした途端に連続殺人鬼が現れたり、居眠り運転をしているバスが突っ込んできたりするんだ。今日も話しかけようとしたらUFOにキャトラれたし……」

「怖っ！！何その子！？」

達也が引きつった顔で叫ぶ。

「そういうことなら任せてよ。僕がその子を口説いてみせる」

「お前が口説いてどうすんだよ！！」

達也が自信満々の東吾にツッコンだ。

「敵は危険製造機^{メーカー}か。頑丈な装備が必要そうだな。ミスリルの剣はどこにしまったっけ？」

「あるか！！あってもそんなもん必要ねえし！！別に敵じゃないからなっ？」

最後は少しげんなりしながら達也は雄輝にツッコミを入れた。

「告白の手伝いか……やってやろうじゃねえか！！」

部長が立ち上がり叫んだ。

で、路上

「あの子か？」

「ええ、そうです」

「確かにありゃあ美人さんだなあ……」

物陰に張った巨大テントの中で囁き合う怪しい男達がいた。

「彼女、世界一神ってる危険メーカーであると同時にうちの学校でベスト五に入る美人だからね……」

美人という言葉を強調して頷く主役。

「そういうことならやはり僕が口説きに行こう」

「お前は自重しろ」

立ち上がろうとする東吾を達也が抑える。

「離せ！！僕は彼女を愛してるんだ！！」

「マジで自重しろおおおお！！」

達也が叫んだ。心からの叫びだった。

「しかし、俺達はなんで、テントに入ったまま移動してるんだい？
逆に目立つたろ？」

「テントが俺の命だからだよ」

天斗がさらりと答える。

「そうかい」

複雑な表情を浮かべた主役は、分かってなさそうな顔で頷いた。
「それじゃ、まず俺が声をかけてくる」

タキシードが立ち上がり、テントから這い出た。

そして彼女に近づいていく。

「やあ、元気？」

そう声かけた瞬間、タキシードの肩を叩いた奴がいた。

「ガルバラザナン・オルテガペテロ？」

意味が分からないことを言ってきた奴の顔を見ようと振り返る。
そいつはまるで悪魔だった。

「え？」

腕を掴まれ、タキシードは悪魔に時空の歪みのように黒い穴に引きずり込まれた。

「ヤラヂイガナ・バルシガニユ」

「なっ？あ、ぎゃああああああ！！」

それを見ていた天斗がぽかんと口を開けたまま言った。

「今、タキシードの奴が時空の歪みみたいなのに引きずり込まれたんだけど……」

「あれが危険メーカーの能力だよ」

「……なあ、とりあえず一旦キャンプにしない？」

天斗が提案した。

「駄目だ。タキシードの犠牲を無駄にするな！！」

「次は、俺が行く。男で侠で漢なら真っ直ぐ進むべし」

そう言い火怒ポンが走りだした。

直後、大量のカラスが飛んできて火怒ポンを連れ去る。

「男、侠、漢おおおお！！」

「なあ、今火怒ポンがカラスに連れ去られたんだけど……」

「俺、帰るわ。帰ってモン。ンの続きやらねえと」

「待ってくれ」

逃げようとする雄輝を主役が止めた。

「彼女は諦めるー！！」

青ざめた顔で叫ぶ部長に主役は言い放った。

「諦められるか！！俺はほっとけないんだよ！！いつも一人で悲し
そうな表情を浮かべてる彼女のことか！！」

主役の悲痛な叫びに部長は逃げ出そうとする足を止め目を細めた。
「まあ、あんな体質じゃ誰も近寄らないだろうしな。んじゃ、やる
か」

部長が言った言葉を天斗が続けた。
「キャンプをな!!」

続く

愛は人を動かせる2（前書き）

U
M
A

愛は人を動かせる2

「お前がそこまで彼女のことを想っているのなら、俺達も命をかけてやる」

真剣な目をした主役に部長がニヤリと笑いかける。

「命をかけるって、これ本当に色恋沙汰の話なんだよな？」

達也は苦笑した。

「で、どうするんだい？」

東吾が尋ねた。

「俺の神ポイントは、世界一神ってるものまね師だ。俺がお前に変装して近づいてやるよ」

部長が大きな袋をテントの中から引っ張り出す。

「だから、それじゃ意味ねえって」

達也が言った。

部長が彼女に近づいて告白しても意味はないだろう。やはり、告白は主役自身がしなければ意味がない。どちらにせよ、近づけると思えないが。

「だから、それだけじゃねえって。おい、主役！！」

「なんだい？」

「お前も一緒に行くんだ！！同じ姿をした人間が二人でいけばきつと世界一神ってる主人公のお前の方が生き残るに決まっている。だろ？」

「はあああああつ！！部長あんた！！捨て身で特攻するつもりなのか！？それに二人で突っ込だつて意味がないかもしれないだろ！！」

さとぼんが驚嘆の声を上げた。

「試してみないと分からないだろ？それに、俺達は神頼み部だ。神頼みぐらいしか為すすべがなくなつた奴らをまるで神様のように助ける部なんだよ。さてと、あとは……」

部長はおもむろにケータイを取り出し、電話をかけ始めた。

「もっしー、あ、火怒ポン？お前今どこだよ？」

『男らしい侠である漢は今、パリだああああああ！！』

「どこまで連れて行かれたんだよ！！」

しばらく黙ってから部長は言葉を繋げる。

「なあ、漢なら絶対勝てない相手にどうやって挑む？」

『直進あるのみだ！！』

「だよな。結局、俺達にやそれが一番だよな。んじゃ」

電話を切り、再び電話をかける。

「もっしー、タキシードか？今どこ？ケータイ通じるってことはまだ、世界のどつかにいるんだろ？」

『いや、魔界』

げんなりした声が電話ごしに聞こえてくる。

「マジで？生きてるのかよ？」

『かろうじて。で、何だよ？』

「いや、一つ頼みがあるんだが」

『んだよ？』

「ああ、それはな……」

部長が何か囁く。それからケータイを閉じ、東吾に声をかけた。

「主役に女性の口説き方を教えてやれ」

「いや、今回は彼の気持ちをストレートにぶつけた方がいい。今回の場合は重要なのはテクじゃない。主役君の彼女に対する愛情だ！！」

東吾は首を横に振りそう言い放つ。

「お前がそう言うんならそうだろうな」

「愛は困難を乗り越える糧となる！！」

東吾が叫んだ。

次に部長は雄輝の方を向く。

「お前はどのようなルートが一番最短か考えてくれ。そういうの得意だろ？」

「りょーかい」

雄輝が答える。

「そんじゃ、雄輝のシュミレーションが終わり次第、全員で突っ込むぞ。お前らは主役が何かに巻き込まれそうになったら体を張って盾になれ。何がなんでも主役の思いを彼女に届ける！！」

「りょーかい」

達也が言った。疲れたような顔をしているが口元は笑っている。

「お前ら……」

主役がうるんだ目で部員達を見つめる。

「まだ泣くなよ、主人公。泣くのはハッピーエンドを迎えてからだ」
「んじゃ、いきますか」

今の彼らが恐れるものはない。ただ、前だけを見据えて走り出す。

パリにて

「うおおおっ！！」

「ボンジュール」

「漢なら日本語で返すべし！！こんにちは！！日本への道はどこですか！！」

赤髪の男が一人、鼻の高い青目のフランス人の人達に注目されながら走り回っていた。

魔界にて

「おおおう！？」

「バルデガン・ベダマナス？」

「もうそのブクブク泡立ってる緑色の液体はいいて！！」

「ナヤマアサ・デハナタナラ」

「ああ、呪文にしか聞こえねえっ！やめっ、ちよっ！？お前、いらねえつつってんだろ！それより賭けしないか？」

「ミヤナアハナ・ダナヤアサ？」

「俺はある奴の告白が成功する方に賭ける。お前は？」

皆の意識が一つになり、そして……

後日

青年は、草原に座っていた。

傷だらけの青年は隣に座っている彼女を見て微笑む。

どんなに傷ついても、どんなに辛くても、青年は彼女と共に歩んでいける自信があった。

何故なら彼は主人公なのだから。淡い太陽の日差しが彼らを照らす。

彼と彼女の物語はまだ始まったばかりだ。

「これでよかったのか？」

「ん」

傷だらけの7人は部屋にいた。疲れたような顔で、でもどこか誇らしげな顔をした7人は床に転がっている。

「それじゃ、とりあえずキャンプにしますか」

春は運命を動かせる（前書き）

ここまでUMA

春は運命を動かせる

「うー、寒いな」

達也は自分の体を抱きしめながら歩いていた。彼は震えている。

季節は春、なのに今日は寒い。まあ、午後10時という微妙な時間だから別にそこまでおかしくないが。

なんの依頼もこなかった部活を終えて、達也は今帰宅途中だった。10時というのはちとばかり遅い気がするが、これまた何らおかしくない。

「うう、立ち読みが長すぎた」

何故なら、今日は月曜日。某有名週刊マンガ雑誌の発売日だ。部活仲間と夕食を食べ終えてから読み始めたら、いつの間にかこんな時間になっていた。

「だー、帰って風呂入って、寝よ」

達也はマンションで一人暮らしをしている。別におかしいことではない。神立神様学園高等学校だけではなくこの街の学校のほとんどの生徒がマンションで一人暮らしだ。マンションといっても、ぶっちゃけた話、寮みたいなものだ。

何故そんなおかしいことになっているかというと、神様を必要としている世界のために次期神様候補を育てているという名目で存在する達也の通っている神様学園高等学校を初めとして、この街に存在する全ての学校は、世界にとって必要なものを生産することを目的としてつくられ、普通じゃない才能を持った人間が集められていた。そして、それぞれの分野に励むためという名目で街の外、つまり外の世界と隔離されている。

もちろん大人も住んではいるのだが、大概の大人はこの街の学校の卒業生だ。

中学生までは全寮制なのだが、高校生になってからは自立できると判断され、一人暮らしが原則となる。

学生達の収入は生活費として、国から支給されている金と、部活で稼ぐ金の二通りだ。

だから、ほとんどの学生はなんらかの部活に所属している。その部活も部活で、郵便配達部、商業部、掃除部などの仕事にしか思えない部活がほとんどだ。

そんな世界に必要とされているものを生産するためのこの街は世間一般ではこう呼ばれている。

- 『^{エデン}楽園』と。

まあ、実際楽園とはかなりかけ離れているのだが。

と、そういう訳で帰るべくマンションへ向かう達也だったが、ふと裏路地から人の声が聞こえてきて足を止めた。

「なによ!？」

「ゲツヘツへ、俺達と遊ぼうぜ」

ベタな展開すぎるだろ。

達也はそうツツコミたくてウズウズしてきた。

覗いてみると、恐らく染めているだろう金髪少女がモヒカン肩パツドマツチヨ野郎達にからまれていた。

「世紀末!？」

「ああん？」

しまった。ツツコンでしまった。と頭を抱える達也。

「何もんだてめえは?この神ってる世紀末男の俺達の邪魔をするとは良い度胸じゃねえか？」

世紀末男が卑下な笑いを浮かべる。ほんと、世紀末だ。

「ドラ。もんだ!！」

ヤケクソになって叫ぶ達也。

「……」

世紀末男達は困ったように黙ってしまった。

金髪少女も呆れた目で達也を見ていた。

達也は自分にはボケが向いてないことを学んだ。

「だって、何えもんだって聞いてきたから……」

少しいじけてみる。

「馬鹿にしてんのかあああつ!!」

世紀末男がキレた。

「お前馬鹿じゃなかったのかあああつ!!?」

「そういう意味じゃねえつ!!もういい、テメエ、ぶっ潰してやる」

青筋を浮かべて突撃しようとしてくる世紀末男を見て、反射的に金髪少女の手を掴んで逃げだす。

「ちよつと、何で逃げるのよ!? こういう時はパパッと倒すのがテンプレでしょう!?!」

「残念、俺はそんなヒーローみたいに強くはないんだよ!!」

「カッコ悪っ」

「うつさい、あの場を助けただけでも感謝してくれ!!」

もともと助ける気はなかったんだからとは口が裂けても言えない。

「まああて、こらああああ!! ヒーツハアツ!!」

世紀末男のうちの太っている男が信じられないくらいの速さで追いかけてくる。

「何で!? 何であいつあんなに速いのよ!?!」

「俺は神つてる体系に似合わない速さの人間だからな!!」

「嘘だろおお!!?」

二人は必死で逃げ続ける。

「だああーっ!! 疲れたああー」

「何よ、男のくせにだらしない」

世紀末男達を振り切ってから疲れて草むらにへばってる達也に金髪少女が言った。

「だいたい誰のせいでこんなことになったと……」
そこで言葉が止まった。

初めてゆっくり金髪少女の顔を見たからだ。

可愛い。染めているだろう金髪が似合っていないのが残念だがそれをふまえても可愛いの部類に余裕で入るレベルだ。ただ、金髪じゃなくて茶髪だったらもっと可愛かったはずだ。勿体無い。

「私のせいよね……」

金髪少女は俯いてしまった。

「いや、えつとあのさ……」

あんまり強いことが言えなくなった達也は東吾から教えて貰った対女性スキルを使おうとする。

「何？」

「……いや、何でもない」

ああ、俺はヘタレだ。と、達也はため息をつく。

「そう」

怪訝な目で達也を見てから、金髪少女は胸ポケットからタバコとライターを取り出し、タバコを口にくわえた。

「っ！？没収！！」

達也はライターとタバコを奪いとる。

「なにすんのよう！？」

ライターとくわえていたタバコを奪い取られて達也を睨みつける金髪少女。

「未成年の煙草は禁止だ！！」

「何？あんた非行少女を救ってから煙草を取り上げるって、熱血教師きどりですかあ？」

「うむ、可愛い女の子の健康な体を守るのが熱血教師の役目ですからね」

「別に女の子限定じゃないでしょ？……って、今可愛いって言った？」

少女が目パチクリさせる。

「いや、川が良いって言った」

達也のヘタレ度はそうとうなものだった。

「……そう」

少し寂しそうな顔をする。

「可愛いつー!!」

「っ!？」

金髪少女の顔が真っ赤に染まっっていく。

「まあ、そういうわけで君の健康な体を守る義務があるわけなのだよ!」

「じゃあ、煙草はとりあえずはやめとく」

「うむ。そうしてくれたまえ」

「あんたのキャラがつかめないわ」

少女はクスツと笑う。

「そっぴやさ、君髪染めてるよね？」

「え、うん。だから？」

「もともと茶髪？」

「何で分かったの？まさか、ストーカー!？」

「ちげえよ!! 会ったばかりかだろうが!？」

達也が否定する。

「チエツ、慰謝料とれると思ったのに」

「この悪女が!! それでさ、個人的感想でいうと元の色にした方が断然可愛いと思うよ？」

その言葉に金髪少女は顔を赤らめて、俯いた。

「……そう思う？」

「そう思う」

達也はヘタレなりに頑張る。

「そっか……ん、元気だ。それじゃあね」

金髪少女は立ち上がった。

「ん、じゃあな」

帰り際に金髪少女は思い出したように振り向いた。

「あつ、ちなみに私は神立神様学園高等学校2年B組、せんとうこはる泉堂小春だから。その……今日は助けてくれてありが……とう。なんて、別にあんたの為に言っただけじゃないんだからね!!」

「あざとっ!？」

走り去る少女の後ろ姿を見ながら達也は苦笑した。

「そっいゃ、俺の名前は名乗り忘れたな」

その後、達也は帰宅途中にタバコとライターを弄びながら帰って
いたところを青い服を着た男達に連れ去られました。

少女の出現は流れを動かせる（前書き）

U
M
A

少女の出現は流れを動かせる

「月に代わってお仕置きよ!!」

「ついに女装にまで手をだしたか!？」

椅子の上に立ってステッキを振り回す金髪ツインテールの某美少女戦士の女装をした部長に達也は悲鳴のようなツツコミを入れた。

「男らしくないぞ!! 侠なら、常に漢らしく振る舞うべし!!」

「大丈夫、魔王は倒しにいけるさ!! でも、俺のパーティーにはいないぞ?」

「僕も男に愛を求めるほど餓えてはいないよ」

「とりあえず、キャンプにして頭を冷やさないか?」

「オエツ」

口々に言う部員達に部長は口を尖らせ、言った。

「おいおい、俺はお前達のことを思ってこんなことをやってるんだぞ? あと、吐いた奴でてこい、怒らないから」

「いや、ないわゝ、さすがにひくぜ?」

「つーか、何でそれが俺達の為になると思ったのさ? どうせなら治癒術士になつてくれればよかったのに、今俺のパーティーに足りないんだよね」

「男としてどうなんだ?」

「東吾、無償の女好きだろ? どうだ?」

今にも吐きそうなタキシードが東吾に勧める。

「だから言っただろう!! 僕にそういう趣味はない!!」

「だよなー、やっぱお前も意外とストライクゾーン狭いの?」

「嘗めてくれるなよ。僕は幼女から女子中学生までをこなす人間だ!!」

「ただのロリコンじゃねえかつ!!」

胸をはって叫ぶ東吾に達也はツツコんだ。

「冗談だよ。実際は幼女から熟女までだ」

「広っ！！」

「ただ美少女限定ね」

「それ熟女入らないじゃん！？」

付け足した東吾にまたもや達也がツツコミをいれた。

「まあ、実際幼女から女子大生までが限界かな」

「幼女は外さねえのな！？」

達也がツツコミ終えてから、「いや、待て美人だったら二十代後半でもなんとか……」とか呟いている東吾を放っておいて、達也は部長に尋ねた。

「で？何でそんな恰好してるんだ？」

その質問に部長は顔をしかめて答える。

「そんなの決まってるじゃないか。他の部には女子生徒も所属してるのにうちの部にはムサイ男しかいないから仕方なく……」

「仕方なくねえよっ！！男の娘は女性成分に入りません！！」

「いや、入るんじゃない？」

首を傾げる部長に若干危機を感じて達也は身を引いた。が、まけずにツツコむ。

「入んねえよ！？」

「なんなら、先生に聞いてみる。先生ー、男の娘は女性成分に入るんですか？って」

「何、そのバナナは遠足のおやつに入るんですか？みたいな質問！？うちの顧問は……ああ、あの人は駄目だ」

達也の顔がみるみる青ざめていく。

「おい、あの人の話はよせよ。死ぬから、あの人地獄耳だから」

タキシードが顔を真っ青にして言った。

「そうだな」

達也が頷く。

「でも、確かに女性は欲しいね。ムサイもんね。特に僕のような女性を愛してやまない人間にとっては」

東吾がしみじみと言った。

そんな時にドアが開いて。

「すいませーん、佐藤達也君っている？」

腰まである茶髪の少女が入ってきた。

「へ？俺だけど……って！？」

達也は入ってきた茶髪少女を見て絶句した。

「昨日、あれから補導されたって聞いたんだけど？」

「……」

「タバコのこと、私のこと話しても良かったのよ？」

「ねえ、聞いてる？」

茶髪少女に言われて、達也は一人の少女の名前を出した。

「……もしかして、泉堂小春ちゃん？」

「そうだけど？」

元の髪の色が茶髪が似合うとは思っていたし、茶髪の方が可愛いと言った覚えもある。しかし、ここまで変わるものなのか？

前から可愛い顔立ちをしているとは思っていたが、まさかここまでは。

「……」

「でも、庇ってくれてありがとう。なんて、全然思っていないんだから！！今日だって購買部に行く途中でちよつと通りかかったから寄っただけでわざわざここに来たわけじゃないんだから！！」

顔を真っ赤にしてそんなことを言う茶髪少女を見て達也は確信する。

このあざといツンデレは昨日の金髪少女だ、と。

だいたいこの部室は校舎の一番端、購買部は真逆だ。

「ううん、やっぱり茶髪似合うな」

達也は思わず呟いた。

「ほんと？」

確かめるように上目遣いで達也の表情を伺う小春。

「ほんと」

「……そう」

顔を真っ赤にしながらも嬉しそうな表情を浮かべる小春と彼女を見つめる達也。

なかなかいい雰囲気だが、そんな雰囲気は一瞬で壊された。

「だああっ！！ラブコメオーラー持ってくんな！！」

「佐藤君！！何でこんなに可愛い子僕に紹介してくれなかったんだい！？」

「いったんキャンプにしないか？」

「……可憐だ」

「俺の女装の意味が……」

一気にまくしたてる部員達に気圧されながらも達也は小春を紹介する。

「この子は泉堂小春ちゃん。昨日いろいろあって知り合ったんだ」

「そこを詳しく！！」

「男なら漢らしく全て話せ！！」

「キャンプでもしながら全て話せ！！」

などと問い詰められて達也は仕方なく話す。横で小春は顔を赤らめて立っていた。

話し終えた途端に、東吾が小春の手を取る。

「小春さん、今からでもおそくない！！僕と二人で愛の逃避行に出発しませんか？」

「えっと……」

小春は少し身を引いた。

「断る！！」

達也が叫ぶ。

「佐藤君、君には聞いてない！！」

「断る！！」

「だから……」

「断る！！」

「話を聞け！！」

「断る！！」

「断るなああああああ！！」

そんなやりとりを見ていた小春は達也に声をかけた。

「あ、じゃあ私帰るから。それと、あんた。帰る時声かけて。外にいるから。か、勘違いしないでよね！！別にあんたを待ってるわけじゃないんだから！！一緒に帰ろうなんて全然考えてないんだからね！！」

顔を真っ赤にしながら小春は部屋を出ていった。

「さーとーうー君？」

その後達也が理不尽に皆にぼこられたのは言うまでもない。ただ、部長は何故か部室の隅ですんでいたが。

魔王の誕生は需要を動かせる（前書き）

U
M
A

魔王の誕生は需要を動かせる

「逃げちゃ駄目だ逃げちゃ駄目だ逃げちゃ駄目だ」

「いや、逃げてー!!」

達也のツツコミをむなしく、ボゴンツと音をたててボールが部長に当たった。

「はい、アウトー。部長、外野に行つて」

東吾が部長に言つた。

「とうかさ……」

「何だ？仲間が当たつたのを見ただろう？言い訳は男らしくないぞ！！男らしくルールに従えー!!」

火怒ポンが達也に向かつて顔をしかめる。

「言い訳じゃねえよ。だから……」

「なんだ？違うのか？男らしくはつきり言えー!!」

「いや、だから……」

「ええい、侠らしくはつきり言えー!!」

「いや、言つつて。だから……」

「漢らしくはつきり言えー!!」

「お前が邪魔してんだろぅがぁぁあつー!!」
達也が叫んだ。

「男なら自分の責任は自分で持てー!!」

「いや、お前のせいだからなー!!」

「責任転嫁など漢らしくないー!!」

「お前がなあつー!!」

達也が吼える。

「で？何なんだ？」

天斗が流れを戻そうとする。

「いや、だから……」

「さつきから、ダカラ、ダカラって。そんなに飲みたいならその

自販機で買ってこい!!」

部長がうんざりした顔で言う。

「飲み物の話じゃねえよつ!!」

達也はツツコミを止めない。

「俺、コーラ」

「僕は、ダージリンティー」

「侠は緑茶だ」

「俺、ポーション。本物な」

「俺、コーヒー、エスプレッソな」

「あつ、俺はイチゴオレでいいから」

「行かねえよつ!!」

「「「「「えー」「」「」」」」」

「えー、じゃねえつ!!後、さつきポーションって言った奴!!学校の自販機にあるわけねえだろ!?!つかこの学校にもねえよつ!!」

「ありますよ、ポーション」

「ねえよつ!!って……え?」

達也は思わずツツコンだが、知らない声だった。

「いや、本当にあるんですけどね、ポーション」

見知らぬ声の持ち主は困ったような顔をしてから、緑色の液体が入った小瓶を差し出した。

「え?」

「どうぞ、我が商業部冒険部門特製ポーションです」

「ああ、どうも。つつか、冒険部門ってなんだ?」

もったもな意見である。

「冒険部門というのは、武器、防具そして、冒険の役にたつ道具を扱っている商業部のグループです」

「需要ねえつ!!」

「何いつ!?!」

達也の叫びをかき消すような声を雄輝がだしていた。彼の目はか

つて無いほど輝いている。

「……」

「聖剣とかあるのか？なあ、ポーションって本当に回復するんだよな？なあ、なあ？」

激しく食らいつく雄輝に若干ひきながらも、商業部の少年は答えた。

「ええ、回復しますよ」

「嘘だろ？そんな魔法みたいなものが……」

達也は半信半疑だ。

「いえ、本当です。一口飲んだら気分爽快、二口飲んだら癖になる。三口のんだらやめられない、止まらない！！若干中毒性が強いのが、玉に瑕ですけど」

「危ねえよっ！！それはもう、ポーションじゃねえって別のものだよ！！白い粉に限りなく近いだよ！！」

「そんなことないですよ。幸せになれます」

「だからそれ危ねえって！！」

達也はツツコんだ。見知らぬ相手だろうが容赦しない。それが彼のツツコミ魂^{ソウル}。

「で？なんか依頼があつてきたんだろ？」

部長が尋ねた。

「はい、実は……」

「実は？」

「売り上げが全く伸びないんです。最近なんてポーション購入者以外さっぱりで」

「でしょうねえっ！！」

「仕方なく、武器購入者を増やす為に魔王召喚の儀式を部でするんですが……」

「物騒だな！？」

「なかなか成功しません。どうしたらいいんでしょう？」

「成功しなくてなによりだ！！」

達也のツツコミに商業部の少年は責めるような視線を送る。

「僕達に飢え死にしろと言うんですか？」

「いや、別にそんなこと言わねえけどよ」

そう、この街では学生の生活は、国から支給される、生活費（研究費）と部活で稼ぐ金で成り立っている。親からの仕送りという手段もあるにはあるが、できれば頼りたくないのが、高校生というものだ。

「ううん……」

「魔王召喚しようぜ！！」

「お前はこの街を恐怖に叩き落とす気か！？」

はしゃぐ雄輝に達也はツツコんだ。

「大丈夫、魔王召喚してもこの勇者（俺）が倒れてみせる！！」

勇者雄輝は胸を張って、指で自分を指す。

「無理だろ！！」

「できる！！何故なら俺には日頃から培ってきた経験値があるからだ！！」

「ゲームの中にな！！」

達也のそのツツコミを雄輝は鼻で笑った。

「フツ、違うな」

「何？」

「経験値はいつも俺の心の中にある！！」
セーフデータ

「意味ねえっ！！かっこつけて言っただけと全く意味をなしてねえっ！！」

そんな達也と雄輝の茶番を見ながら、商業部の少年は尋ねた。

「で、どうやってたら魔王を召喚できるんでしょう？」

「魔王召喚すること前提なんだ！？」

「ああ、それなんだけどなあ、うちの部に魔界に行ったことがある奴がいる」

部長が部室の隅に視線を向けた。

そこには、「もうあのブクブクしてる緑色の液体は嫌だー！！」

と、ポーションに怯えながら丸くなってるタキシードの姿があった。
「おい、タキシード。お前主役の彼女のところ行って魔界に飛ばして貰ってから、魔王連れて来い」

「嫌だ!!」

部長のむちゃくちゃな命令にタキシードは即答する。とっさに他の部員に助けを求めたが……

「男ならとつとと行くべし!!」

「キャンプでもしながら待ってるぜ」

「魔王楽しみにしてるぞ!!」

「魔界の女の子達によろしくね」

「ま、そういうことだ。行ってこい。以前帰ってこれたんだ。また帰ってこれるさ」

と、あっさり突き放された。

「こんの薄情者おおおおおお!!」

必死で逃げようがすぐに捕縛されて、タキシードは部長にひこずられて行った。

タキシードが部室の外へと引きずられて行くのを見ながら、商業部の少年は首を傾げて来てからずっと思っていたことを口にする。

「今更ですけど、なんで室内でラインまで引いてドッジボールなんてしてたんです?」

「ああっ!!? ツッコもうと思ってたのにツッコミ忘れた!!」

その後、魔王召喚には成功したらしく、魔王が校内に現れ武器がバカ売れしたが、すぐに神ってる教員達に鎮圧され、商業部冒険部門と神頼みの人間は反省文を書かされました。

筋肉は漢の心を動かせる（前書き）

U
M
A

筋肉は漢の心を動かせる

「あれ、部長は？」

部室に入って、部長がいないことに気づいた達也が他の部員達に尋ねた。

「部長ならこの通りだ。どこに行ったか賭けてみるか？」

タキシードが一枚の紙切れを達也の前に突き出した。

「ん？」

そこ書いてあったのは、

“旅にでます。探さないでください。ほとぼりが冷めたら戻ってきます。追伸、尻拭いよろしく”

という文章。

「何これ？意味分かんねえんだけど」
達也が顔をしかめる。

「ああ、俺達にもさっぱりだ。とりあえずキャンプでもしながら考えよう」

天斗がそう言ったところで、ズシズシと床が揺れ始めた。

「？」

訝しげに達也が音がする方向を見て首を傾げた。

こちらに近づいてくる。

「なんだ？」

音が止まった。

「む？このドア、どうやって開くの？押すのか引くのか書いていて欲しいものだ」

「はあ、兄さんはほんと馬鹿だなあ……。どうせ、ドアなんかいずれ朽ちるんだ。いつかの僕の熱意が朽ちていったようにね。蹴破ってもかまわないさ」

とても野太い声が扉の向こうから聞こえてくる。

「……………」

首を傾げる部員達。

「む？そうか、では遠慮なく、いくぞ！！マッスルレボリューション（筋肉革命）！！」

扉が吹き飛んだ。

「え？」

部員達が固まる。

「ここの部長はどこだああああっ！！」

「兄さん、落ち着きなよ。そんなに大声をだすと、声が枯れるよ。そう、あの日の僕のようにね」

二人の筋骨隆々が頭をかがめて部室へとはいつてきた。

二人を見て火怒ポンは呟く。

「……漢のロマンだ」

「そうなのっ！？」

達也は心底嫌そうな顔をした。

「む？部長はいないようだな。仕方があるまい、ならば君達に手伝ってもらおう！！」

首に赤いスカーフを巻いた筋骨隆々がそう宣言する。

「何をだ？」

「実はここの部長には近々我々筋肉愛好会が開くマッスルキングダムに参加してもらう予定でな。今日はその説明をしにきたのだよ」

「断る！！」

達也は即答した。

「ふむ、そうか。是非とも参加したいか。おっと、名乗り遅れたな」
「無視された！？」

嘆く達也を放っておいて、筋骨隆々は続ける。

「我が輩のあだ名は、前ムツキー！！」

「僕は後ろムツキー……………」

そこで二人で筋肉を強調するポーズをとって一言。

「二人合わせて前後ムツキムツキ!! (……)」

いつもなら「意味分かんねえよ!!」とかツッコむ達也なのだが、この時ばかりは、ひきすぎて言葉も出なかった。

「あつ、もうこんな時間。俺、魔王倒さなくちゃ」

いち早く反応した雄輝が脱出で逃げ出そうとする。

だが、行く手を前ムツキーに妨げられた。

「おや?こんなところにもやしっ子が。どこにいくのだ?駄目だぞもつと鍛えなくちゃ」

「い、いや、俺勇者だから!!格闘家じゃないから!!」

ジタバタと暴れる雄輝。

「ほう?」

「証拠だつてあるんだぞ!!ほら、バランスの良さが売りだ!!力だけじゃない」

そう言つて雄輝が携帯ゲーム機を取り出した。

画面には勇者のステータスとグラフィックが映っている。

「ふむ、駄目だな。貸してみろ」

前ムツキーは雄輝のゲーム機を取り上げた。

「ちよつ!?!」

「マッスルレボリューション(筋肉革命)!!ほれ」

渡されたゲーム機の画面にはやたらムキムキになって、ステータスが力だけずば抜けて後はカスになった勇者、いや、格闘家が映っていた。

「あああああああつ!?!何やつてくれとんじゃああああああ!?!バイオ。ザードのク。スじゃあねえんだよ!!はっ!?!あいつも5でいきなりムキムキになった!!まさか!?!」

ニヤリと笑う前ムツキー。

「き、貴様ああああつ!?!」

俺の努力があああつ!?!と叫び、床に崩れ落ちる雄輝を尻目に前ムツキーは熱心にゲーム画面に話しかけている東吾のゲーム機も取り上げた。

「な、何をするんだい！？ま、まさか！？お前！？やめろ、やめてくれええええつ！？」

「マッスルレボリューション（筋肉革命）！！ほれ」

そう言つて前ムツキーが東吾に返したゲーム機に映っていたのは

……

何故か劇画チックになった筋骨隆々の女の子だった。

「う、嘘だろ！？由香利ちゃああああああん！？」

おいおいと泣き始める東吾にゲーム内の女の子、由香利ちゃんは言つた。イヤホンが外れた為、声が聞こえてくる。

「東吾殿、我が輩と一緒に美しい筋肉を育んでいこうではありませんかぬか！！」

「う、うわああああああああああああつ！？」

東吾は号泣しました。

そんな様子を火怒ポンだけがうつとりと眺めている。

「や、やばい！！なあ、いったんキャンプにしようぜ！！」

流れを変えようとそう言つた天斗に前ムツキーはこう返した。

「ああ、ブリーズブートキャンプをな！！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2523s/>

神立神様学園高等学校神頼み部の神ってる奴ら

2011年4月23日01時10分発行